

2025 年度 放送番組審議会 議事録

(株式会社ジェイコム九州 福岡局)

日時：2026 年 3 月 5 日 (木) 16:00~17:30

場所：株式会社ジェイコム九州 福岡局 会議室

委員：放送番組審議会委員 6 名中 5 名出席(敬称略、順不同)

(会長) 千 相哲

(委員) 圓尾 容子、川崎 和夫、古瀬 恵、大穂 哲也

事務局：株式会社ジェイコム九州 代表取締役社長 上村 忠
取締役 宮島 哲瑞
福岡局長 上田 康夫
福岡局管理部長 緒方 賢二郎

JCOM 株式会社 J:COM プロダクション本部 映像制作部
リージョナルマネジャー 出貝 仁洋
九州制作グループ福岡拠点長 牧 幸生

1. 開会事務局挨拶

株式会社ジェイコム九州 代表取締役社長 上村 忠

2. 議事進行(千会長)

委員 6 名中 5 名出席につき、放送番組審議会規程第 4 条に基づき当会は成立。

まずは JCOM 側から 2025 年度の自主制作番組の制作方針と

実績報告についてお願いいたします。

3. 放送番組内容について

1) 2025 年度 自主制作番組 制作方針

2) 2025 年度 自主制作番組 実績報告

委員)

番組は毎年改良が進んでおり、今回も地域に密着した丁寧な取材が多数見られた。

空手道場や戦争関連の企画など、普段触れにくい情報を分かりやすく発信しており、

高く評価できる。一方で、J:COM が掲げる「安心・安全」や地域密着のテーマを踏まえると、

視聴者がより“自分ごと”として受け止められる企画がさらに広がる余地がある。

福祉や地域の支え合いなど、日常と地続きのテーマを取り上げることで、地域の魅力をより深く伝えられるのではないかと感じた。

委員)

地区予選中継に対して、地域の方々から「ローカルに根付いた取り組み」と好評の声が寄せられている。番組全体として大きな問題は見当たらず、着実に改善されていると感じる。細かな点として、バラエティ番組では字幕が丁寧に入り内容が分かりやすかった一方、スポーツ番組の一部インタビューでは字幕が少なく聞き取りにくい場面があった。選手の思いや表現を視聴者に届けるためにも、字幕の付与や編集の工夫を検討いただきたい。

委員)

地域密着型の番組として着実に進化していると感じる。家庭の備蓄例を具体的に紹介するなど、一般論よりも個人事例を示す工夫は“自分ごと化”につながり非常に良かった。市民投稿ニュースについて、投稿者の映像であることが常に視覚的に分かる表示があると、視聴者の投稿意欲向上につながるのではないか。市民参加を促す仕組みとして、継続的な表示を検討いただきたい。

委員)

他メディアでは扱いにくい社会課題を積極的に取り上げており、J:COM ならではの価値が出てきている。中学生への声かけ事例や、AI を活用した安心・安全の取り組みなど、地域に根ざした実践例を紹介する姿勢は大変良い。

『ジモトで乾杯！居酒屋ゴリけん』では地元の人に焦点を当て、対話を通じて魅力を引き出しており、地域ならではの臨場感が伝わる内容になっている。また、夏の高校野球福岡大会の中継など、他局が取り扱わない領域に踏み込んでいる点は非常に意義があり、今後も継続を期待したい。

委員)

地域の課題解決に向けて踏み込んだ取材が、地域密着型メディアとしての本質であると考えている。人口増加や世代間ギャップなど、地域ごとに異なる課題を取り上げ、コミュニティ形成に寄与する番組づくりが重要。

デジタル回覧板の取り組みは、若い世代が地域とつながる契機として有効であり、町内会が DX に挑む姿をモデルケースとしてシリーズ化することで、地域全体の DX 波及を促す企画としても期待できる。

4. 審議

- 1) 自主制作番組 ダイジェスト視聴
- 2) 番組視聴後 審議・意見交換

委員)

戦争や社会課題のテーマに共通して、“会話から始める”成功例を紹介している点が意義深い。外国人コミュニティとの関わり方を含め、現代の課題に対する実践例として価値ある内容だった。今後も視点を広げ、複数の切り口からの事例紹介を期待する。

委員)

多言語対応や防災表示など、他地域にも応用可能な工夫が紹介されており、汎用性の高い事例として良かった。“自分の地域でもできる”と感じさせる構成になっていた点を評価する。

委員)

3分という短い尺の中で要点が非常に整理されており、最後まで見やすい構成だった。今後も短尺ながらポイントを押さえた企画を継続してほしい。

委員)

丁寧な取材が伝わる内容であった。

ただし、ナレーションの役割や立ち位置がやや曖昧な部分があったため、視覚的な補足や役割の明確化があると、より理解しやすくなると感じた。また、具体的な人数や頻度など、数字の提示が視聴者の“自分ごと化”につながるため有効だと思う。

事務局)

ナレーションは男女で役割を分けているが、今回の内容ではその意図が十分に伝わっておらず、今後の課題として受け止めている。

地域発の課題は全国的な課題にもつながるという意識で制作しているため、寄せられた意見を踏まえて今後もブラッシュアップを続けたい。

委員)

“日の当たらない人・取り組み”に光を当てる番組は、当事者を励ます役割があり、その継続に価値がある。視聴者だけでなく、取り上げられた当事者が元気づく番組づくりを今後も続けてほしい。

委員)

良い取り組みである一方、長期的に続けるためには情報収集の難しさもある。焦らず、継続可能な体制で取り組んでいただきたい。

事務局)

新しい切り口を見つけるには制作側の育成も不可欠であり、地域の中で見えにくい価値に光を当てる姿勢を今後も大切にしていきたい。

委員)

番組づくりにおいて、視聴者を“受け手”ではなく“参画者”として捉える視点が重要。地域住民・事業者との協働でテーマ設定を行うことで、J:COM が地域コミュニティのハブとして機能していくことを期待する。

委員)

子どもが参加できる企画（子ども記者など）は、家族視聴のきっかけにもなり、地域への広がり期待できる。また、SNS とりわけ Instagram の活用がやや弱いため、番組発信の工夫をしてはどうか。全体としては着実なブラッシュアップが続いており、今後も期待している。

5. 閉会挨拶（株式会社ジェイコム九州 福岡局長 上田 康夫）

本審議会で頂いた多くの前向きな意見は、制作現場にとって大きな励みとなる。寄せられた提案や指摘をしっかりと持ち帰り、今後も地域に根ざした番組制作に努めていく。

以上、閉会